

## 喜八阿弥陀堂の由来 与八郎の妻の亡霊



喜八阿弥陀堂の由来 与八郎の妻の亡霊 1



喜八阿弥陀堂の由来 与八郎の妻の亡霊 2

親鸞聖人は稲田に御在留のとき、一切経のあった鹿島へ教典をご覧になるためよく行かれたそうである。そのため稲田から鹿島への街道には聖人にまつわる伝説や史跡が数多く伝えられている。

板敷山より、さらに鹿島方面へ向かった所にあるのが小川の「喜八阿弥陀」である。

茨城空港の近く、小美玉市(旧小川町与沢)に「喜八阿弥陀」はある。

ここには親鸞聖人御真筆と伝えられる「<sup>にじゅうに</sup>二十<sup>こうあみだによらい</sup>光阿弥陀如来画像」「<sup>しょうとくたいししやうまんぎやうごこうさんず</sup>聖徳太子勝鬘経御講讃図」「<sup>ぜんどうだいし</sup>善導大師画像」の三幅があり、県文化財に指定され、長島家によって代々守り伝えられている。冬晴れの夕刻、その「喜八阿弥陀」のある長島宅を訪れた。

大きな木々に覆われて苔生す石段を登ると母屋のわきに 400 年前に立てられたというお堂があり、長島さんご夫婦がストーブを点けて待っていてくれた。我われは暖かなお堂の中でお茶をいただきながらお話を伺う事が出来た。話の節々に個人による維持管理のご苦勞を感じた。

鎌倉時代のこと、長島喜八は幼子を二人残し連れ合いに先立たれてしまった。残された幼女は母恋しさ

に毎夜泣き続けた。すると母の亡霊が夫喜八の枕元へ毎夜現れ、悲しげに「この子を頼みます」と訴えるようになった。喜八は神社仏閣に祈禱を頼んだがそのかいはなかった。困り果てているとき名僧が稲田にいることを聞きつけ、鹿島に向かわれるのにこの地を通る親鸞聖人を呼び止め、このことを話した。聖人は小石一俵分を墓前に集めておくよういった。後日、喜八宅へ訪れた聖人はその小石に浄土三部経を書き、墓に埋めた。そして自ら筆をとり、弥陀如来など三幅の絵を下された。それからというもの、母の亡霊は現れなくなり、幼女もすくすくと成長したという。

祈禱や亡霊などというと、聖人の教えとかけ離れているように感じられるかもしれないが、このような形となって今日まで伝えられていることに、多くの人びとから親しまれた聖人の面影を感じた。

帰り際、お堂の前の広場に目をやると、その傍らには「親鸞聖人御腰掛石」があり、夕日に影を長く落としていた。

2002 年現在、喜八の「<sup>にじゅうにこうあみだによらい</sup>二十光阿弥陀如来画像」など三幅は毎年1月と8月の共に16日、お堂へ安置され、お参り出来る。